

News Letter

ブラックバス

蒸し暑い真夏の昼下がりに、一面にヒシの葉が広がる野池にたったひとりで立ち込んでいる。片手にルアー用の釣り竿。ズボンのポケットにはいくつかのルアーやオモリ。ウエーダーを履かずに、ジーパンとスニーカーの出で立ちで膝の上まで水に浸かっているあたりは正気の沙汰とは思えない。私の中学時代の姿である。

自然に関わり始めるきっかけは、人によって様々である。ある人はバードウォッチングであり、またある人は淡水魚の採集や飼育だったりするが、私の場合、それがブラックバスを対象にしたルアー釣りだった訳である。そして、この魚に関する一連の害魚問題は、生物に対する価値観について深く考えさせられるきっかけでもあった。

ブラックバスは北アメリカ原産の肉食魚であり、日本への移入は1925年に芦ノ湖へ放流されたのが最初である。移殖当初、この魚はその貪欲な肉食性のため、芦ノ湖以外への持ち出しが禁止されていたにもかかわらず、戦後50年のうちにほぼ日本全国に生息域を広げてしまった。生息域の拡大については、ブラックバスの旺盛な繁殖力に加え、釣り人による無計画な放流が主な原因とされている。

私が釣りを始めた十数年前は、ちょうどブラックバスが日本産淡水魚類を食い荒らす害魚としてマスコミに大きく取り上げられていた頃であり、琵琶湖では「ブラックバス撲滅運動」という大規模な駆除が始まった頃である。また同時に、そういった動きの一方で、釣りの専門誌では「在来の淡水魚が減少したのは本当にブラックバスだけのせいなのか?」「自然環境の悪化が原因ではないのか?」という反論の記事が毎号のように掲載されていた。ただ、今思うと、この反論には釣り人側の「ブラックバスが減ったら楽しい釣りができなくなる」といったエゴも含まれていて、一部を除いては冷静さに欠けるものがほとんどであったように思う。

人がある生物に対して好き嫌いを判断する時、「美しい」「格好よい」「おいしい」等様々な基準があると思う。ブラックバスの場合、「釣って楽しい」という点で釣り人は魅了され、無計画な個人による放流が相次いでしまった。このことは、日本において帰化種が分布拡大した例の中では、「人が欲求を満たすため」という目的の点できわめて

希少な例といえる。そして、全国の止水域に生息するブラックバスは、人が自らの価値観や利害だけで生物の優先順位を決め、生態系を左右するはめになったことに対する反省材料として見えてはこないだろうか。

最近、北アメリカ原産でブラックバスと近縁種のコクチバスの生息が桧原湖、小野川湖、野尻湖に続いて琵琶湖でも生息を確認されたそうである。侵入経路についてはいろいろとされているが、鑑賞魚として輸入されたものが何らかの原因で広まったといわれる。この、何らかの原因については、私個人の見解として、釣り人の手が加わっていることは間違いないと考えている。

今後、「勝手に放流をしたのは一部の釣り人だ」というような言い訳がどこまで通じるのか。連帯責任というのではないが、ブームを煽ってきた釣りに関連するメディア、そして私も含めた全ての釣り人が考えなければいけない問題である。

水域に生きる魚たちは人の享楽のためだけに生きているのではなく、またブラックバスもその例外ではないのだから。

(大阪支社自然環境調査室・福田宏)

